

仕えられるためではなく、仕えるために

嶋田 順好

イエスは 12 人の弟子たちと共に「神の国」の福音を宣べ伝えて歩まれました。弟子たちはイエスの愛に満ちた業、力あるみ言葉に惹きつけられ、この方こそメシア（救い主）と信じて従ったのです。マルコによる福音書 8 章 29 節で「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか」とイエスが弟子たちに問いかけたところ、ペトロは「あなたは、メシアです」と明瞭に答えています。ところが不思議にもその応答を受けてイエスが告げたことは「御自分のことを誰にも話さないように」という沈黙命令でした。自然なやり取りの流れからすれば「正しい答えだ。そのことを宣べ伝えなさい」と命じてよさそうなものなのに、それとは反対のことが告げられたのです。なぜでしょうか。そこにはイエスご自身と弟子たちとの間に、メシア理解における深刻な食い違いが横たわっていたからです。そのことは直後のやり取りですぐにわかります。

8 章 31 節以下で、イエスは初めてご自身の口からはっきりと受難予告をなさいました。するとこの時、ペトロは「イエスをわきへお連れして、いさめ始めた」のです。弟子のペトロが救い主であるイエスを「いさめる」とはなんとも不可解なことです。どうしてペトロは、イエスをいさめずにいられなかったのでしょうか。その理由はイエスが「必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺される」と告げたからです。殺されてしまうメシアということが受け入れ難かったのです。だから「縁起でもない。そんなことは金輪際言わないでください」といさめたに違いありません。

しかしこの時のイエスは、この世にこれ以上の厳しい叱責の言葉があるかと思われるほど激しい言葉でペトロを叱りつけました。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」と。この叱責によってイエスは、ご自身がローマ帝国の支配を打破し、イスラエル民族にダビデ・ソロモン時代の栄華を取り戻すために到来した政治的メシアではないことをペトロと他の弟子たちに誤解の余地なく告げられたのです。そのイエスの思いは弟子たちに伝わったのでしょうか。いいえ、伝わりませんでした。事実、2 回目の受難予告をなさった直前にも、弟子たちが互いに語り合っていたことは、自分たちのうちで「だれがいちばん偉いか」（9 章 34 節）というこの世的な地位や権力を巡る問いでしかなかったのです。

更にその弟子たちの思いが鮮明になるのはイエスが 3 回目の受難予告をなさったあとでした。そこではヤコブとヨハネが他の 10 人の弟子たちを差し置いてひそかにイエスのもとを訪ね「栄光をお受けになるとき、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」（10 章 37 節）と頼み込むのです。それをあとから知らされた「ほかの 10 人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立てはじめた」（10 章 41 節）とあります。明らかに彼らは、ヤコブとヨハネに出し抜かれたと思ったのでしょうか。裏を返せば彼らもまた、イエスがこの世の権力を掌握した時、あわよくば自分もその右か左に座りたいと願っていたということでしょう。所詮彼らもヤコブとヨハネと同じ穴のムジナでしかありません。だから腹を立てたのです。

これが 12 人の弟子たちの実態でした。彼らはイエスを愛し、敬い、心を一つにして福音宣教に携わっていたわけではありません。自分だけがイエスに気に入られ、イエスが王に即位した暁には特別に取り立ててもらおうべく足を引っ張り合い、権力闘争に明け暮れていたのです。イエスは、とても辛く悲しかったと思います。なぜならずっと行動を共にしてきた弟子たちが一向にご自身の使命について理解しようとしていないからです。その弟子たちに向かってイエスは告げます。「人の子は仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのである」（10 章 45 節）。このみ言葉こそ、イエスご自身のメシアとしての使命を誤解の余地なく明瞭に示したみ言葉です。まさにここにこそサーバント・リーダーシップの原点があると言えるでしょう。宮城学院の教職員のわたしたちは、この弟子たちのように支配する者としてではなく仕える者として、このみ言葉を日々新たに心に刻みつつ、イエスのあとに従う者でありたいと願います。